

ロインは一瞬だけ暗い顔をして、「わざわざ頼って来てくれたのに、力になれなくてすまないな」

「いやいや、謝んなよ」

ノランが明るく言う。

「お前の推測、俺はかなり当たってると思うぜ？」

「そうだね。私たちはロインから大事なキーワードをもらったよ」

リアムも大きく頷いて、「南に向かう流れの速い海流と、ノアが乗っていたかもしれない客船となると――」

「パルバ港だろうな」

リアムの言葉を引き継いでロインが頷いた。

「この街から西にある、パルバ港。フィネイル海域にはここから船が出てる」

ノランは指を鳴らして、「そこに行きゃあ、ノアが乗ってた船について、港の人に何か聞けるかもしれねえってことか！」

ノランはロインの肩をばんばか叩いて、

「ナイスだ、ロイン！ お前のおかげで、次の目的地が定まったぜ！」

「うん。本当にありがとう、ロイン」

リアムの謝意と微笑みに、ロインは少しだけ頬を染めた苦笑いを浮かべ、肩をすくめた。

「旅は道連れ、世は情け！ ようし、こりゃまた明日の朝から出発だ、ノア！」

ぐっと拳を握るノランに、ノアは申し訳なさそうな顔をした。

窓から見えるガス灯に、橙色の火が灯る。

ロインでも、ノアの素性はわからなかった。

しかし、それでもここに来たのは決して無駄足ではない。

次に向かうべくは、フィルスト大陸南部一番のパルバ港。

「ロインは行かないの？ お祭り」

「俺はやらなくちゃいけないことがあるから……」

ロインは照れながら眼鏡のブリッジを押さえる。

「そうだよな、ごめんね邪魔しちゃって。研究がんばってね」

「あ、ああ」

リアムがひらひらと手を振る。

三人が部屋を出たことを確認すると、ネックが口を開いた。

「街に来る途中で、邪獣が出た」

「邪獣だと？」

ロインは驚いて、眼鏡を掛けなおした。

「珍しいことが続くな。……で、どうしたんだ」

「ノランと倒した」

「魔法か」

「まあな」

「……」

ロインは黙った。

「お前も気をつけろよ」

ネックがひらひらと手を振って部屋を出ようとする、今度はロインが引き留める。

「……お前、本当は分かってたんじゃないか」

「何を？」

「ノアがどこから来たのか特定できないことを、だ」

背中を向けていたネックが振り返る。

「分かってたら来ないさ。第一、そんな嫌がらせするわけないだろ。お前の大事な研究の時間を割いてまで」

ネックが真剣に答えたので、ロインは唾を飲んだ。

しかし、ロインは一度発した熱を治めることができなかった。

「お前はそのままでもいいのか？ なんで……」

この質問をぶつけても無駄だと分かっていたのは何者でもない、自分自身だ。いつだって曖昧な回答しかもらうことができないのだから。また言葉を濁されれば敗北を味わうことになる。ロインは冷めきらぬ熱のままぐっと歯を食いしばった。

ネックはロインの胸中を知ってか知らずか、

「勉強より優先したいことがあるんだよ。それだけだ」

穏やかな声色で答えた。

いつもならばぐらかされるところだが、意表を突かれたロインは驚いて目を開いた。

「ネック？ 行かないのー？」

階段の下から、リアムの声が出た。「すぐ行くよ！」とネックが答える。

ネックがいつものようにへへっと笑って見せる。

「研究、頑張れよ」

「うるさい」

ロインが不愛想に言うとネックは部屋から出た。

ひとりになったロインは、ドアの前で静かに立ち尽くす。

意識せずに拳を握っていた。

「魔法……」

自分にはない、邪獣を倒すほどの力。

改めて認識する。力の差を。